

かたちあるものを超える

和久希著
六朝言語思想史研究

渡邊 義浩

A5判 390頁
汲古書院
[本体 8,000円 + 税]

近年、六朝貴族制論や六朝思想の研究は、六朝文学研究に比べて低迷している。儒・仏・道の「三教交渉」という時代的特性が強調された結果、近年の六朝思想に関する研究は、道教や仏教を主題とする個別的研究ばかりが目につく。もちろん、六朝時代には、漢代のような儒教一尊の気風はないが、四学三教に通底してそれを貫くものは儒教である。

ここに紹介する和久希『六朝言語思想史研究』は、そうした研究情況に、根源的な再考を促す意欲作である。「序論」において、和久は、時代状況と研究史を整理したうえで、次のように述べている。

「本書では、六朝時代にあつては儒教が衰退したために他思想が前景化したのではなく、むしろ六朝時代の儒教が道仏あるいは老莊、文学といった文化的諸価値を積極的に含み込み

ながら、それらの複合体であり、かつ有機的な運動体として不定形に展開した、という思想的仮説を提起する。」(二〇頁)

このように、本書は、あくまでも正統思想としての儒教を中心に位置づけながら、複雑に交錯する六朝の諸思想・諸文化を横断的に叙述するものである。その際、本書の基軸をなす主題は、「言語」である。本書は、これを「人文」すなわち「人」における合理的秩序(文)として把握する。したがって、本書の探究は、形而上的至高(言語を超えるもの)と合理的精神としての「言語」という問題系に止まらず、当時隆盛した「文(文章)」および文章論を再構成しようとする取り組みを含んでいる。「人文」としての「言語」を主題に採用することにより、本書は、既存の学問領域に対して柔軟な立場を堅持しつつ、当時の知的世界への根源的な探究を可能としているの

である。

その探究は、「序論」に引き続き、具体的には、「建安期の学問思潮」・「魏晋期の形而上学」・「東晋期の仏教受容」・「斉梁期の文学思想」の課題について、それぞれ三章からなる本論において展開される。論評に先立ち、まずは目次を掲げておこう。

序論

第一章 大道の中——徐幹『中論』の思想的地位

第二章 経国の大業——曹丕文章経国論考

第三章 建安文質論考——阮瑀・応瑒の「文質論」とその周辺

の周辺

* * *

第四章 王弼形而上学再考

第五章 言尽意・言不尽意論考

第六章 言外の恍惚の前に——阮籍の三玄論

* * *

第七章 言語と沈黙を超えて——王坦之「麈尾論」考

第八章 形而上への突破——孫綽小考

第九章 逍遙の彼方へ——支遁形而上学考

* * *

第一〇章 辞人の位置——沈約『宋書』謝靈運伝論考

第十一章 経典の枝條——『文心雕龍』の立文思想

第十二章 隠——『文心雕龍』の言語思想

序論は、六朝思想の展開と研究史の概要とが、本書の関心に沿いながら手際よくまとめられる。あえて結論を設けていない、本書全体の縮図をなす。

第一章は、建安七子の一人、徐幹の思想に、曹魏の新たな時代思潮を見出そうとするものである。とくに『中論』に見える「大道の中」という語に着目することで、徐幹の思想が、魏晋思想の先駆をなす一面を持っていたと指摘する。

第二章は、曹丕が「一家の言を成す」と称揚した徐幹『中論』を参照しながら、曹丕による文章経国論の内実を明らかにする。そして、曹丕の実際の文章制作そのものが、「経国の大業」（曹丕『典論』論文篇）の実践であり、世界像の全体を示すものとして、国家的意義を持つ営為であったことにも論及する。第三章は、建安七子の阮瑀・応瑒による「文質論」を思想的な背景から検討する。とりわけ、応瑒「文質論」の行論が、新しい「文」の確立を志向していること、そして、それが曹魏の国家観に沿いつつ、建安文学の盛行の思想的な基底にあったことを指摘する。

「建安期の学問思潮」理解の方向性は、取り立てて新奇なものではない。しかし本書は、徐幹『中論』や阮瑀、応瑒の「文質論」など、これまでの研究ではあまり注目されなかった資料の検討により、従来の思想史解釈を補強し、奥行きを与えることに成功している。

第四章は、王弼の形而上学について、堀池信夫やルドルフ・ワグナーの王弼解釈を援用しながら再考を試みる。ここでは、概念的把握（称）という観点から、王弼における「道」と「無」とが、必ずしも同一とは見なせないことを論証する。

第五章は、魏晋期の「言尽意」・「言不尽意」問題を取り上げ、何晏・欧陽建・王弼の行論を検証する。注目すべきは、ときに「言不尽意」の立場に属するとされてきた王弼について、その行論が、語ること（言語）と示すこと（卦象）を方法として、「尽意」を模索するものであった、と導出した点にある。ただし、王弼の行論それ自体は、語り得ないものを語ろうとするため、その理解には、登りつめた論理的階梯を忘却することが要請される、という。

第六章は、阮籍が『老子』・『莊子』・『周易』の「三玄」すべてに、「論」を著したことに着目しつつ、阮籍の思弁的構想は、形而上的高の直観的な体得を前提にしており、それゆえ論理としては不徹底なところがあつた、と指摘する。本

書では、こうした論理的な途絶について、直接経験の純粹性・超絶性を保全するものとみる。

「魏晋期の形而上学」を扱うこれら三章は、抽象的なテーマを扱いながら、いずれも明晰度の高い論考となっている。とくに、王弼の言語思想の解釈は、鋭敏な論理によつてその思索をあとづけており、本書の白眉である。

第七章は、東晋期の清談亡国論である王坦之の「廢莊論」を取り上げ、その行論が、実際には批判対象である『莊子』を含めた「三玄」、そして王弼・郭象らの清談を踏襲していた、と論じる。さらに王坦之が、仏教の影響を受けつつ、言語／沈黙の相対的対立を超える地平を開示しようとしていたことにも言及する。

第八章は、孫綽の思想が老荘的な「道」を紐帯としながら、儒・仏・道の三教を融和的に捉えんとしたことを検証する。さらに、「遊天台山賦」について、孫綽が魏晋玄学や仏教的思维を踏襲しながら、実際に形而上的な境界への突破を志向していたことを論じる。

第九章は、支遁の『莊子』逍遙遊の解釈と般若思想の解釈を取り上げる。支遁が般若思想を媒介に、魏晋玄学の形而上学的思索にさらなる展開をもたらしたことを王弼・郭象の行論と適宜対比させながら論証する。

「東晋期の仏教受容」を対象とする三章もまた、抽象度の高い精緻な議論が展開される。ただ、本書は、それをそのままに論述するのではなく、そこに潜在する玄学的語彙を丹念に掘り起こすことにより、中国古典思想の伝統から仏教的理念への接近を丁寧に考証している。

第一〇章は、『宋書』謝靈運伝論における「辞人」の評価に着目する。沈約が、あらゆる「文章」を『詩経』以来の儒教的正統性の内部に位置づけようとしたことを論証するのである。そして、沈約による声律論の提唱については、儒教的正統性に基礎づけられた「文」の構築を企図するものと位置づける。

第一章は、『文心雕龍』における「經典の枝條」の語に着目する。それにより劉勰が、あらゆる「文章」を經典的価値

のもとに集束させ、国家秩序の資源とみていたことを論証する。そのうえで、經典が文彩を持つように、諸々の「文章」にも文彩が必要であり、それを劉勰が五行説に基づく「立文の道」として提示したことにも論及する。

第二章は、『文心雕龍』に見える「隱」という概念について、単なる含蓄や余韻として理解することを却ける。そして、劉勰の行論が、象数易の「互体」という卦爻操作を参照しながら、言外の本質を言語以外の知的構造において把握する可能性を見ていたことを論じるのである。

「齊梁期の文学思想」を論じる三章は、今日では一般に「文学史」や「文学理論」と目される著作を対象として、その基層に儒教が根ざしていたことを明確にするものである。こうした見方は、二〇世紀的「文学」という文脈を免れている点

池田恭哉著

南北朝時代の士大夫と社会

知識人たる士大夫が、南北朝という国家が興亡を繰り返す時代に、自己を国家や士大夫社会の中で如何に位置づけ、何に立脚した生を営もうとしたのかを、「貴族社会」の枠組みに囚われずに多角的に論じる。顔之推論一家と社会と国家、北朝士大夫と国家・仕官と隠逸をめぐって、南北朝時代の継承と展開―他時代と比較した南北朝時代の三部構成。6500円

戸内俊介著

先秦の機能語の史的発展

前漢以前の中国語の総称である上古中国語を中国語史の中でどのように位置づけるかを考究。本書は、一般性の高い中国語文法史記述に向け、とくに機能語に重点を置き、伝世文献・出土文献の両方面から歴史的發展を検証する。6000円

研文出版 (税別)

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
<http://www.kenbunshuppan.com/>

において、とりわけ重要な成果と言える。

「序論」で提起した思想的仮説の論証は、以上のように果たされる。「建安期の学問思潮」・「魏晋期の形而上学」・「東晋期の仏教受容」・「斉梁期の文学思想」は、いずれも六朝の思想・文化における重要な一面面であるが、本書の「人文」としての「言語」を基軸とした探究によれば、それらは、やはり深底に潜在する儒教的エートスを無視しては成り立たないものであった。このことは、少なくとも近代以降ほとんど顧慮されず、放擲されたままであった。本書の根源的な探究は、学術史にとつてまことに意義深いものと言える。

もちろん本書にも課題はある。三教四学のすべてに言及していないために、たとえば「史」が、つとに六朝中期には経学的注釈態度から離脱し、独自の史学的方法論を確立したことをどのように位置づけるのか、などについては、今後のさらなる研究の進展を心待ちにしたい。

なお、本書を通読すると、言語・文章を論じながらも、私たちあるものを超える、語り得ないものへの欲望がつねに底流しているように思われる。それは若き哲学者としての和久の特徴を示しているが、その特徴は、二〇世紀の分析哲学に親和的である。二〇世紀的「文学」概念の相対化を果たした先には、やはりその哲学的スタンスにも新時代の新たな視座

が求められよう。今後の探究において、独自の哲学的地平を切り開いていくことを期待するものである。

青山学院大学の大上正美先生の研究室で、無愛想にパソコンをいじっていた学部生のころ、筑波大学の堀池信夫先生の研究室で、院生として議論していたころ、いろいろな和久君を思い出しながら、本書を読ませていただいた。

(わたなべ・よしひろ 早稲田大学)